

ロードムービーにおける人物の行為を含む景観描写に関する研究

西村龍人¹⁾, 堀越哲美²⁾,
¹⁾名古屋工業大学, ²⁾名古屋工業大学大学院

Landscape Depiction and Human Activity in the Road Movie

Ryuto Nishimura¹⁾, Tetsumi Horikoshi²⁾,
¹⁾Nagoya institute of technology, ²⁾Graduate school of Eng., Nagoya institute of technology

Abstract: The purpose of this paper is to clarify the characteristics of passing scenery in road movies whose themes are traveling and transfer. Three movies by Wim Wenders were selected as objects. The still pictures were picked up and recorded from sequences of these movies. The landscape elements in the pictures and camera angles were extracted. Those elements were analyzed by using Hyashi's Quantimized Theory 3. Two axes which indicated subjective-objective and quiet-active, respectively were obtained. The scenes were classified into 9 groups by the cluster analysis. Each groups represented different camera frame composed with combinations of positions of road and buildings. Those scenes also indicated feelings and situations of characters after the composition of the scene.

Key words: Landscape, Transfer, Travel, Movie, Road

要旨: 旅や移動が主題となるロードムービーを用い、変化していく景観の特徴を明らかにすることが本研究の目的である。対象として、映画監督ヴィム・ヴェンダースの三作品を選定し、作中の景観シーンを静止画像で抜き出し、それぞれの景観構成要素やカメラアングル等を抽出した。それらを説明変数に数量化3類とクラスター分析を行った。その結果、景観を記述する「主観性-客観性」「閑散-賑わい」の2軸を得て、景観は9つのグループに分類された。グループを考察すると、景観は道を中心として構成され、主に水平に近いカメラアングルで映し出されていることが分かった。さらに登場人物の感情や状況を表現する、特徴的な構成要素の意味を見出した。

キーワード: 景観、移動、旅、映画、道

1. はじめに

人は生活の中で移動しながら景観を体験することが多い。そのようなシークエンスで展開される景観を評価する試みは従来の研究でいくつか行われている。本研究では映画が人の行為も含む移動景観を捉えた一つの適当な媒体であると位置付け、生活や都市の研究資料として考える。研究対象として、旅や移動することを主題とするロードムービーが、人の体験する移動景観を記述する媒体としてより適切であると考えた。そこで、ロードムービーを撮り続けている一人の映画監督の作品を対象にし、その監督の視点を通して、変化していく景観と旅の生活のもつ意味を明らかにしようと試みた。

2. 方法

2.1 対象作品の選定

ドイツ人映画監督ヴィム・ヴェンダースはロードム

ービーの旗手と言われ、ロードムービーを数多く撮っており、国際映画祭でもいくつかの受賞歴を持っている。その彼の作品の中で、登場人物が旅をして様々な景観が映し出されている初期の三部作「都会のアリス」「まわり道」「さすらい」を選定した。三作品はいずれも全編ロケーション撮影となっており、その中でドイツ国内がロケーションとなっているシーンを対象とした。作中や文献で地名の明らかになったものを表1に示す。なお、三作品相互に物語の関連はない。

2.2 対象画像の抽出

映し出された景観を分析するにあたり、作中から抽出した静止画像（以下、画像）を用いた。1カットから最低1枚、パンニングや移動撮影の場合は景観がある程度変化したところでその都度、画像を抜き出した。その全画像から建物内等を除き、重要と思われる画像196枚を対象とした。

2.3 画像の情報を示す指標

既存の研究(萩島, 1990)に基礎を置き、画像を解析する指標として以下に示すものを設定した。表2に示すように画像に現れている景観の構成要素を分類した。図1に示すように視点から各構成要素までの距離を測定し7分類した。さらに画像を詳細に分析するため、

【A. 線的構成要素(道、線路、川、橋)の構図 B. 線的構成要素の形状 C. 線的構成要素の相互関係 D. 建物の配置 E. 樹木の配置 F. 乗物の描写 G. 登場人物の人数 H. 登場人物の描写 I. 移動主体(乗物、登場人物)の動き J. カメラアングル K. カメラワーク】としてそれぞれ図2に示すように分類を行った。さらに構成要素も含めたものを説明変数に数量化3類による分析を行った。

3. 結果及び考察

3.1 構成要素の特徴

構成要素の出現割合を図3に示す。出現数は樹木群73%、道65%、車60%、建物群48%、草地45%の順に多かった。湖・海は全体で6カットと少なかった。全出現構成要素は962個の内、自然物は383個、人工物は579個と、ほぼ4:6の割合であった。

次に距離景については、全体の要素の内42%を近景が占めていた。要素別に見ると山は遠景に74%と多く現れており(表3)、樹木群や草地は全域に広がって描写されていた。工場は数は少ないものの、一般の建物とは違い、煙突などを含んだシルエットが中景から遠景にかけて映されていた。超近景に現れる要素(図4)としては車が約30%を占め、車内から外を見る描写もあった。建物の一部やその他(電柱など)を超近景に映し、奥行きを強調させるものも約30%記録した。

3.2 撮影の特徴

カメラアングルとカメラワークの集計を表4に示す。カメラアングルは全体で水平が73%を占めていた。「まわり道」では俯角が31%而他二作品に比べ10%ほど多い。構成要素とカメラアングルの関係を見ても、要素ごとに目立ったばらつきは無く、全体と同程度の割合であった。カメラワークは作品によって特性が出ている。「都会のアリス」では登場人物の車や電車に乗った移動撮影が多い。「まわり道」では空撮が比較的多く、俯角が多いことの要因になっている。逆に「さすらい」では空撮は一つもなく固定、パンニングが多く、パンニングの撮影では、車の動きを追うものが比較的多く見られた。

3.2 数量化3類の結果

各シーンを構成する要素の出現分布を用いて、数量化3類を行った結果を図5に示す。固有値が2軸と3軸を境に急な低下が見られたので、1軸と2軸につい

表1 対象作品と登場都市名

タイトル	都会のアリス	まわり道	さすらい
製作年	1973年	1975年	1976年
モノクロ/カラー	モノクロ	カラー	モノクロ
上映時間	111分	99分	175分
アスペクト比	4.3	16.9	16.9
登場都市名	ヴッパータール エッセン デュースブルク オーバーハウゼン ゲルゼンキルヒェン	グリュックシュタット ハンブルク ボン ポッパルト フランクフルト	リュートネブルク リューヒョ ヴォルフスブルク エーバーン ヘルムシュテット ホーフ オストハイム シューニンゲン ハスフルト ヴィツェンハウゼン パート・ヘルスフェルト
抽出画像枚数	47枚	61枚	88枚

表2 構成要素の分類

自然物	山、湖・海、樹木、樹木群、川、草地、砂地、畑
人工物	建物、建物群、GS、道、車、橋、線路、電車、船、工場、その他

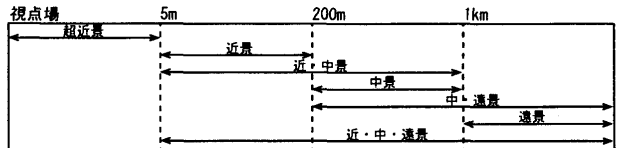


図1 距離景の分類

A: 線的構成要素の構図
 A1「正面」 A2「斜め」 A3「平行」 A4「パノラマ」

B: 線的構成要素の形状
 B1「直線」 B2「曲線隠」 B3「曲線」 B4「分岐交差」

C: 線的構成要素の相互関係
 C1「並行」 C2「上下」 C3「交差」

D: 建物の配置
 D1「道沿い」 D2「アイストップ」 D3「印象的」
 D4「シルエット」 D5「正面」 D6「散在・林立」

E: 樹木の配置
 E1「線状」 E2「孤立」 E3「散在」 E4「森林」

F: 乗物の描写
 F1「中前」 F2「中横」 F3「中後」
 F4「外前」 F5「外横」 F6「外後」

G: 登場人物の人数
 G1「一人」 G2「二人」 G3「三人以上」 (注: 物語に関わる人物のみ)

H: 登場人物の描写
 H1「前」 H2「横」 H3「後」 H4「向き合う」

I: 移動主体の動き
 I1「乗物が動いている」 I2「人物が動いている」

J: カメラアングル
 J1「水平」 J2「俯角浅」 J3「俯角深」 J4「仰角」

K: 撮影方法
 K1「固定」 K2「パン」 K3「移動」 K4「空撮」

図2 画面構成の分類

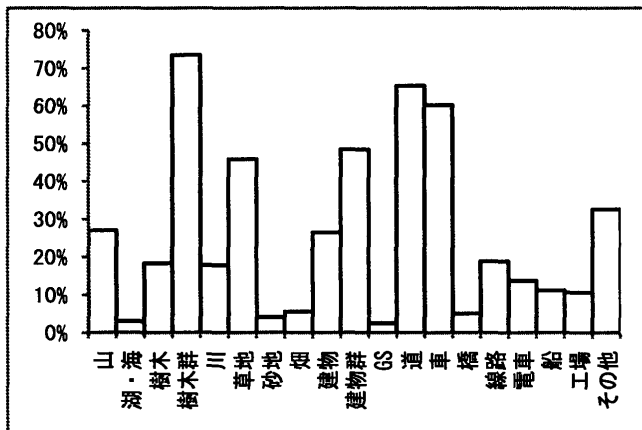


図3 構成要素の出現割合

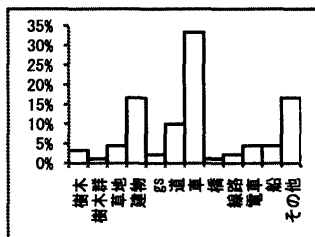


図4 超近景に出現する要素の割合

表4 カメラアングルとカメラワーク

カメラアングル	水平	俯角浅	俯角深	仰角
都会のアリス	81%	6%	13%	0%
まわり道	64%	20%	11%	5%
さすらい	75%	17%	1%	7%
計	73%	15%	7%	5%

カメラワーク	固定	パン	移動	空撮
都会のアリス	30%	17%	47%	6%
まわり道	39%	16%	31%	13%
さすらい	47%	34%	19%	0%
計	40%	24%	30%	6%

表3 構成要素と距離景のクロス集計

	超近景	近景	近中景	中景	中遠景	遠景	近中遠	計
山	0	2	1	2	5	39	4	53
	0.0%	3.8%	1.9%	3.8%	9.4%	73.6%	7.5%	100%
樹木	3	26	2	4	1	0	0	36
	8%	72%	6%	11%	3%	0%	0%	100%
樹木群	1	35	32	14	18	16	30	146
	0.7%	24.0%	21.9%	9.6%	12.3%	11.0%	20.5%	100%
川	0	10	12	0	3	2	8	35
	0.0%	28.6%	34.3%	0.0%	8.6%	5.7%	22.9%	100%
草地	4	17	22	2	7	7	29	88
	4.5%	19.3%	25.0%	2.3%	8.0%	8.0%	33.0%	100%
建物	15	24	4	5	1	3	0	52
	28.8%	46.2%	7.7%	9.6%	1.9%	5.8%	0.0%	100%
建物群	0	48	18	12	2	8	6	94
	0.0%	51.1%	19.1%	12.8%	2.1%	8.5%	6.4%	100%
道	9	73	26	3	2	2	9	124
	7.3%	58.9%	21.0%	2.4%	1.6%	1.6%	7.3%	100%
車	30	78	7	5	0	2	0	122
	24.6%	63.9%	5.7%	4.1%	0.0%	1.6%	0.0%	100%
線路	2	16	10	2	1	2	1	34
	5.9%	47.1%	29.4%	5.9%	2.9%	5.9%	2.9%	100%
電車	4	18	3	1	0	2	0	28
	14.3%	64.3%	10.7%	3.6%	0.0%	7.1%	0.0%	100%
船	4	11	3	5	0	1	0	24
	16.7%	45.8%	12.5%	20.8%	0.0%	4.2%	0.0%	100%
工場	0	2	1	6	3	2	0	14
	0.0%	14.3%	7.1%	42.9%	21.4%	14.3%	0.0%	100%
その他	15	31	8	1	1	4	3	63
	23.8%	49.2%	12.7%	1.6%	1.6%	6.3%	4.8%	100%

て考察する。1軸のマイナス方向ではカメラが主人公の乗物に乗っていたり、水平のアングルが多く、より主人公に近い目線で描写している。それに対しプラス方向では空撮や、高台からの俯瞰のカットが多いことから、1軸は「主観性-客観性」と解釈した。2軸のマイナス方向では建物などの構成要素が少なく、プラス方向では逆の傾向があるため、「閑散-賑わい」の軸であると解釈した。

3.3 クラスター分析による景観の分類

数量化3類の結果より1、2軸のサンプルスコアを基にウォード法による階層クラスター分析を行った。その結果、9つの景観に分類できた。図5で類型毎にサンプルプロットを囲み、各景観の代表的な画像と樹形図の概略を示す。以下に各景観の特徴を記述する。
 類型1：「複合線的景観」は道、線路、川、橋の線的構成要素が複数現れて、相互に並行したり交差している。構図としては正面か斜めに映しているものが多い。登場人物たちの旅が続いていたり、交差する(出会いと別れ)ことと重ね合わせるような表現も見られた。
 類型2：「道の移動景観」は道を主に車で移動しているところを捉えている。道の形状は直線、曲線、分岐交差と様々で、街並みの中を走っている場合もあれば、田園的なものも見られる。車はF4「外前」で映される傾向が強い。
 類型3：「遮蔽景観」は道の正面の構図で、アイストップの建物があつたり、道がカーブして先が見通せないといった街並みが捉えられていた。比較的人物が大きく映されていることが多い。主人公の目的がなかなか達成できないというときに挿入され、閉塞感を

表現していると言える。

類型4：「横の景観」は線的構成要素が平行に映されたり、乗物の横の窓から外を見ていたり、進行方向と垂直の視線で描写される。人物や乗物も横から捉えられ、パンによる撮影が比較的多い。

類型5：「川の景観」は川辺の景観をパノラマまたは平行に映したものである。人物は川を眺めていたり、渡ろうとするところであつたり、船上にいたり様々であつた。川を渡る前後で人物の心境や関係が変化するというような表現も見られた。

類型6：「ロードサイドの景観」は車を道の外れに停めるなどして小休止するようなシーンである。GS や小さな売店に立ち寄る場面もあつた。人物が車から降りて動いていることが比較的多い。

類型7：「空撮の景観」は空撮で街並みや線的構成要素を深い俯角で捉えたものである。「都会のアリス」のラストカットはカメラが上空に上がっていき、「まわり道」のオープニングではその逆となっていて、物語の始まりと終わりを印象的なものにしていく。

類型8：「特徴的な建物の景観」は田園的な景色の中に一つの特徴的な建物が映される。カメラアングルは様々で、地形と建物をより印象的に映そうとする意図が読み取れた。人物が映っていることが多いが、行為自体は物語上の必要性を感じられないものもあり、映画の構図をつくるという意味において、より監督の作家性が出ているシーンだと考えられる。

類型9：「建物の一部を見上げる景観」はこれから入る建物の上部や、駅の標識を見上げたものである。人物の目線で映していると言える。

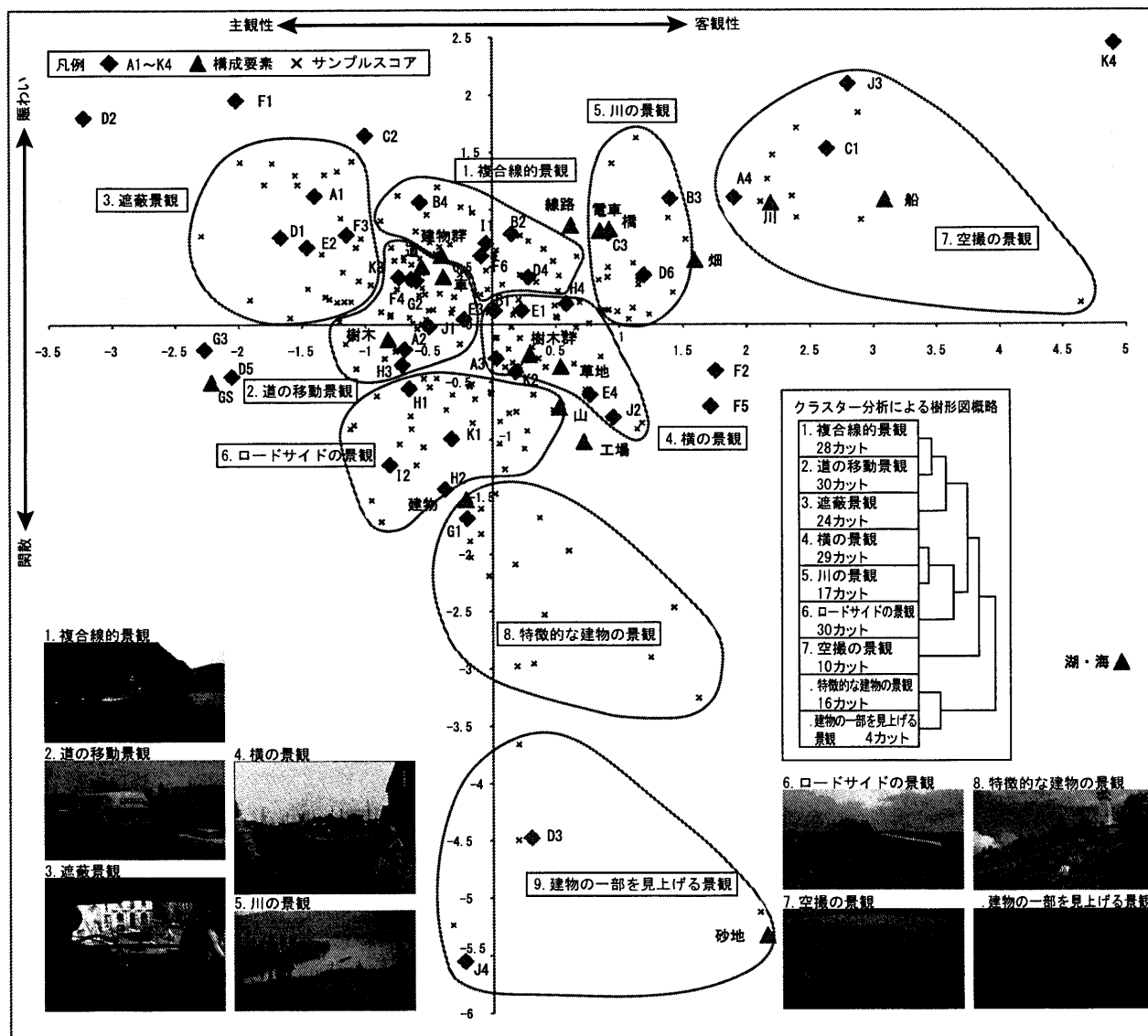


図5 1軸-2軸におけるカテゴリ及びサンプルプロットとクラスター分析による景観の分類

4. まとめ

ヴェンダース監督によるロードムービーで描かれる景観について変化していく景観と旅の生活の意味を探究した。その景観は道を中心に構成され、主に水平のカメラアングルで映し出されている。移動形態は車によるものが多く、他にも鉄道、船、バイク、自転車、徒歩と種々の移動が描かれていた。撮影形態に関しても、時々挿入される空撮や高台からの俯瞰撮影によって登場人物の旅を客観的に捉えるカットや、移動する乗物から景色を映したり、人物の視線から建物などを見上げることによって臨場感を演出するシーンなど、様々な描写のなされ方を抽出できた。また、物語及び登場人物の感情や状況を、景観の特徴を使って表現していると考えられるシーンも挿入されていた。これらの景観は「主観性-客観性」「閑散-賑わい」の2軸によって説明でき、9つに類型化され、描かれたものの景観特性とシーンの意味を見出した。

5. 文献

- 萩島哲, 大貝章, 金俊栄, 岩尾轟, 1990, 19世紀ヨーロッパ風景絵画にみる風景分類に関する研究, 日本建築学会計画系論文集 413:88/93
- 山本浩司, 堀越哲美, 田中稲子, 2003, 山田洋次監督による映画「男はつらいよ」の風景観と日本の景観に関する研究, 日本建築学会大会学術講演梗概集(東海), 717/718
- 樋口泰人(監修), 1997, ヴィム・ヴェンダース, エクスファイア・マガジンジャパン

<連絡先>

連絡先氏名: 西村龍人
 住所: 愛知県名古屋市長和区御器所町
 所属: 名古屋工業大学
 E-mail アドレス: 20116050@stn.nitech.ac.jp